ベストピア Bestopia
第418号
2021年12月号
パリ通信
第120号

日本沈没とコロナの不思議

小松左京さんの名作「日本沈没」が再びテレビで放映され、12月12日完了した。
原作は1973年、映画化もされ、その後も度々テレビで放映され、2021年版は東日本大震災を経験し且つコロナ禍を加えた内容になっている。
少数の科学者が日本沈没の予想と危機を訴えても人々は信用しない。そのような人々も東京に震災が起これば真剣に考えるようになる。東京が崩壊しない限り日本人の楽観性は打ち破れないかのように、「日本沈没」の前触れとして東京に大災害が発生し首都機能、政府の機能が壊滅状態になることによって、人々が科学者の警告を信じるようになる。
政府要人のリーダーシップのあり方を考えさせられる名作であると私は思う。
日頃の政府への信頼性によって危機管理は決定づけられる。
私はこの作品が大好きで、本作品に先行する「復活の日」もDVDで繰り返し見た。
今回のドラマでの副題は「希望の人」となっている。人類の存亡を防ぐ一つの方法が示されているからだろうか。

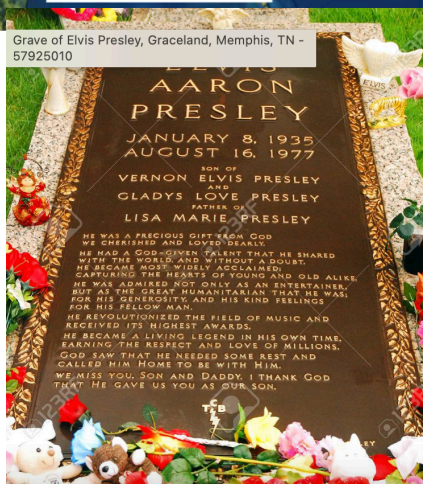
このドラマが最終回を迎えた頃、アメリカ合衆国の６州を襲ったスーパセルの映像が映し出され、私は一瞬、「日本沈没」が同時に頭に浮かび、物語は単なる非現実ではないと錯覚してしまった。あり得ないことではない。科学の発達は文明を変え、文明の変化は人類に便利さの極致をもたらし、その結果、気象までも変化させている。

「今回の竜巻と気候変動との関連について、竜巻などの気象を専門とするアイオワ州立大学のウィリアム・ギャラス教授は、局地的な竜巻への影響を判断するのは難しいとしながらも「気候変動によって以前は竜巻が起きなかった時期にも発生するようになる。冬場に巨大な竜巻が発生するのは気候変動の影響として予測されていることと一致する」と話しています」（NHK取材）

アメリカの発表であるので、かなり控えめなものになっているが、温暖化の影響であることは多くの人が感じていることである。
温暖化については国際的な課題となって各国が取り組みを始めている。
アメリカ史上初めての最大級の竜巻と発言したバイデン大統領のもとでアメリカがどれほどの積極性を地球温暖化に示すか注目したい。

最近の日本の発表で産業革命前の1850～1900年の平均気温に比べ、2050年には約2・5度上がるという予測が発表された。

メンフィスの思い出



今回スーパーセルの被害に遭った米国南部テネシー州メンフィスに2回訪問（1979年１月と８月）していることを思い出した。この小さな街は1977年エルビス・プレスリーの急逝によって世界の脚光を浴びていた。
私がメンフィスに出張できたのは、当時勤務していた中堅化学メーカーが第二次オイルショックによって商社経由で仕入れていた原料の調達ができなくなって、短気で横暴な社長がその商社を脅し色々な謀略を企てたが、どれも上手くいかなかった。躍起になった社長が私に「お前が行って買って来い」と命令してくれた。私にとっては天国に昇る嬉しさであったので、一つ返事で引き受けた。彼との毎日は暴力との戦いで職場は戦場であった。（その詳細は時を改めます）
買い付けるのはトウモロコシから抽出されるダイマー酸という接着剤の原料であった。米国の会社も中小企業であったがトップに近い人と交渉することができ第一回目は6ヶ月分買い付けに成功した。原料不足は更に深刻になり8月第二回目の交渉を命じられメンフィスに向った。8月11日の誕生日を飛行機の中で祝い決意を固めて現地に向った。交渉は６ヶ月間の安定供給を取り付け成功したが、私はその暴力会社に戻ることが嫌になってダラスからロスアンジェルスへの飛行機の中で長い長い辞表を書いた。その手紙が到着するには数日を要し、帰国の報告はすることができた。報告に社長は満足して労ってくれたが翌日から私は逃げた。辞表が到着してから、執拗に追いかけられ、嫌がらせをされたが無抵抗で時間をまった。そしてその年の8月20日から学習塾を開業して生計を立てた。

この社長との思い出の一つ。入社して６ヶ月頃、部下が仕訳けのミスをした。最後の桁が１か７か見分けがつかなかった。私の監督不行き届きということで、私は突然右の頬を殴られた。その瞬間、私は左の頬を突き出して殴りやすくした。彼は殴ることをやめた。彼がクリスチャンであったかどうかは分からない。若い時に就職した会社の社長がクリスチャンであったことはある紳士録年鑑から分かった。私を殴ることができなくなった彼はその分を私の上司であった彼の妻に向けた。彼の妻はそれに耐えていたが家庭では仕返しをしていたと私に言った。不思議な夫婦であった。家庭で仕返しをされた翌日の会社では犠牲者が多くでた。私はそれを阻止したが、阻止すればするほど、激しい仕打ちとなった。その結果私は阻止することを諦めた。怪我が最小であることを祈る毎日であった。遠藤周作の小説が救いとなった時代である。
私が辞めて数ヶ月後に工場で火災が発生し、その三日間の不急不眠の復旧中に若い社員が倒れた。解剖の結果その青年は胃癌であったが病院に行く暇がなかったという。生き地獄

のような会社であった。33歳から38歳の5年間私はこの会社の要職について生計を立てた。今はこの会社の名前は本社も工場もない。
メンフィスという地名から思い出した一コマである。
（本件の記録は「オフィスと道標」という共同出版の最後に投稿し全国の大学の図書館に収められている）
私はこの5年間の地獄の特訓のお陰で大抵のリスクには対応できる強い力を身につけることができ、保守的の代表格である都市で臆することなく税理士として活躍することができた。今も危機管理能力は衰えていない。それが見込まれて現役で活躍できていることに感謝しています。

危機管理の要点

危機管理は仮説の連続である。どれほどの仮説が立てられるか。その中には馬鹿げたものも少なくない。憂慮と一刀両断されることが多い。的中率は半分以上あったが採用されたのは10%未満である。長年私と付き合ってくれている人々が今、それを証明してくれている。
土曜休暇、禁煙、残業ゼロ、子育て優先、自宅勤務社員の導入、高い労働分配率、勤続5年以上の女子社員のヨーロッパ旅行制度、試験２週間前の休暇制度、完全独立支援等大企業に先駆けて導入し実践し仮説を証明してきた。業界からは追放に近い処遇を受けたが怯まなかった。
仮説には失敗がつきものである。それを咎めたり、罰したりすると仮説は出てこなくなる。罰しても人は育たない。
これらの学びは5年間の地獄の恐怖職場からの経験である。恐怖の上の秩序からは陰湿な企業文化、小さな失敗を隠す、隠し合い、庇い合う精神的な雰囲気が醸成される。それが大きな事故となる。最終責任は社長ではなく本人となる。組織は人を守らない。

日本沈没を再度視聴して私はこんなことを思い出した。絶体絶命を前にしてのリーダーの在り方、大きくは官僚や政治家に望むことであるが、このドラマは私たち日常のリーダーシップの在り方、組織を動かす原動力は何か。個人間の信頼と総和、又は螺旋的な絡みの中での信頼関係の構築というものが、いかに大切であるかを教えてくれる。

小松左京氏による「日本沈没」は１億2000万人の日本人が世界各国に移民として受け入れられて助かるところで終わっている。難民受け入れ問題で苦悩する世界にあっても日本人が集団移民として受け入れられる世界があるというのは希望である。大いなる仮説である。良識ある少数の官僚が命懸けでこの筋道をつけていく物語の展開は人間讃歌の希望である。
この2021年が終わろうとしている時期にこのドラマが放映されたことに関係者の何らかの意図があったことだろうと思う。それはドラマの後半で沈没という物理的現象に加えて感染症の流行が起こり移民計画が中断する場面があり、リアリティを高めていることから伺える。そして感染症の原因であるウイルスが気候変動と関連して描かれている。

文明が最も進んだところで精神なき専門人、心情なき享楽人が到達したところはなんであったろうかが問われているように私には思えた。
内閣府は２１日、北海道から東北の太平洋沖で発生が予想される最大級の地震による被害想定を公表した。マグニチュード（M）９クラスの地震の後に発生する津波で、最悪の場合、１９万９千人が死亡する。被害の規模は死者・行方不明者が２万人を超えた東日本大震災をはるかに上回るという。「日本沈没」の影響が政府に聞こえたのであろうか。

コロナの不思議

オミクロンと呼ばれるようになったコロナの反撃が始まった。特にイギリスの発症が異常に多いと感じるのは私だけであろうか。コロナ患者数のベスト10と日本、韓国、イタリアを加えて表にした。

	コロナ患者数21/12/21（万人）	国名	21/12/20 週平均（人）	人口（万人）	世界順位	国土面積 1000ha	世界順位
①	5,110	アメリカ	144,967	33,290	3	983,151	3
②	3,475	インド	6,931	139,340	2	328,726	7
③	2,221	ブラジル	3,415	21,400	6	851,577	5
④	1,152	イギリス	82,807	6,820	21	24,361	80
⑤	1,006	ロシア	27,908	14,590	9	1,709,825	1
⑥	919	トルコ	18,700	8,500	17	78,535	36
⑦	874	フランス	52,800	6,540	22	54,909	49
⑧	683	ドイツ	17,300	8,390	19	35,758	64
⑨	617	イラン	2,264	8,500	17	174,515	17
⑩	553	スペイン	27,891	4,670	31	50,595	53
	172	日本	152	12,610	11	37,797	63
	541	イタリア	16,205	6,040	24	30,207	72
	11	韓国	6,709	5,130	28	10,040	109

順位はコロナ患者累計数（2021年12月21日現在）
累計４位のイギリスの伸びは凄まじい。21日の発生数は91,734人である。オミクロン率は90%近くになっている。人口は日本の54%、累計患者数では日本の7倍近く、最近の発生数では500倍を超えている。人口がほぼ等しいフランスに比べても累計で1.3倍、直近の週間で1.6倍である。ドイツと比較すると累計で1.7倍、直近では4.8倍である。人口はドイツの81%であるから換算累計では2倍、直近では6倍となる。
パリ通信の古賀さんに現地の状況を伺うと次のようなメールをいただきました。

マスクについて

フランス人の受け止め方はコロナ以前とコロナ後で180°変わりました。
以前はマスクをしている日本人を訝しげにみていたフランス人ですが、コロナ対策としてのマスクがいかに有効であるかを実感している人が増えています。
コロナに限らず、インフルエンザや急性腸炎などウイルスによる病気がマスク着用で抑えられることが証明される結果となっています。
オランダはクリスマスを前にロックダウンに踏み切りました。イギリスの感染者数も尋常ではありません。
フランスの説明は
「イギリス、オランダ、ベルギーで感染者数が急増しているのはマスクを早く外してしまったせい。フランスはロックダウンはしない変わりにワクチン接種、マスク着用と手洗い、三密を避けるなど個人の責任に於いて年末年始を過ごすよう努めること」
と発表しています。
マスク着用と手洗いがいかに有効であるかは、アジア国、特に日本を見れば一目瞭然とも言います。
確かに、メトロや列車、電車でマスクをしていないフランス人はいません。
義務ではない屋外でも多くの人がマスクを外しません。
フランスがマスク文化にまで至るとは思えませんが、コロナ対策としてのマスク着用はしっかりと定着していると言えます。イギリスの報道を見るとフランス人はマスクをしています。
ただし、食卓に着けばマスクを外し、おしゃべりに花が咲く国民性なので日本ほど厳格という訳には行きません。

マスクの有効性が明らかなようです。日本文化の誇りになるかもしれない。
明治時代前半までは女性は人前で歯を見せないことが上品と見做されていたことを最近のNHK大河ドラマで学んだ。マスクの歴史を知ることにも興味が湧いた。
マスクの歴史は大正時代に始まるが、１９３４（昭和９）年にインフルエンザが猛威をふるい、再びマスクが流行した。以後、インフルエンザがはやるたびに、マスクの出荷量も爆発的に増えていった。それとともに、さまざまな工夫も重ねられ、枠のない布地だけのものが誕生。また、布地もガーゼが使われるようになるなど、次第にその形を変えていった。　流行と衰退を繰り返したマスクであったがやがて花粉症の流行により、再び注目を集めるようになる。　フィルターにもハイテクが応用され、細菌などを防ぐ静電フィルターなどが開発された。　現在の形になったのは、昭和２３年頃から（東京医療用品卸業界八十年のあゆみ）

屈辱的なアベノマスクは年度内に廃棄されると決まった。保存しても管理費用がかかる使い物にならない大失敗、民間企業なら罰金ものである。

次ページからパリ通信です。(120) サマリテーヌ）

パリ通信第120回

パリの老舗百貨店サマリテーヌが16年ぶりに再開

2005年電気配線と建物の老朽化を理由に閉店した百貨店「サマリテーヌ」が16年の長い歳月を経て、今年リニューアル・オープンした。セーヌ川右岸、ポン・ヌフ橋前に位置し、日用品、文具、衣類、台所用品など何でも揃う百貨店として重宝していた。
パリの小さな店から一大百貨店「サマリテーヌ」を創立したのはエルネスト・コニャック(1839-1928)とその配偶者マリー=ルイーズ・ジェイ(1838-1927)である。

エルネスト・コニャックが生きた時代はブティックから大型百貨店へと消費形態が移り変わる時期だった。1838年小さな布地のブティックが1850年代からブシコー兄弟によって百貨店「ボン・マルシェ」へと急成長する。1870年エルネストはポン・ヌフ橋の近くにあった井戸(ヨハネの福音書に登場する「サマリア人の女」の井戸)に因んで百貨店を「サマリテーヌ(サマリアの女)」と名付けた。
2年後「ボン・マルシェ」の優秀な販売員であったマリー=ルイーズ・ジェイと結婚し、1920年代まで「サマリテーヌ」はまさに右肩上がりの大成長を遂げた。

「サマリテーヌ」「ボン・マルシェ」「プランタン」「BHV」、20世紀初頭に頂点を迎えたパリの百貨店は時代のニーズと相まって新たな消費社会を制覇したのである。

1910年以降、エルネストとマリー=ルイーズは美術品を収集し、そのコレクションが今日の「コニャック・ジェイ美術館」所蔵品となっている。また、人道主義活動にも目を向け1916年「コニャック・ジェイ財団」を創立し、病院や施設など医療機関を運営してきた。一代で巨大な富を築き、社会に貢献した実業家夫妻だったのである。

1970年から1985年にかけて第一回目の百貨店「サマリテーヌ」修復工事が行われた。アール・ヌーヴォーとエッフェルの影響が顕著な鉄の建物だが、今回の改装工事で最上階の4面の壁に「孔雀のフレスコ画」が蘇った。地上5階と地下2階に自然光をもたらす鉄とガラスの天井が20世紀

初頭を想わせる。外観もアール・ヌーヴォー時代の黄色とグレーに塗り直された。
今回の改装は「LVMHグループ」(ルイ・ヴィトン、モエ・エ・シャンドン、ヘネシーなどフランスの高級ブランド資本)が出資していることもあり、かつての百貨店は4等分されてしまった。セーヌ川に面した部分は高級ホテル「シュヴァル・ブラン」が入った。
サン・トロペやクールシュヴェルと言ったフランスの高級リゾート地にホテルを構えるチェーン店だ。対岸の造幣局やフランス学士院が見渡せるバルコン付きスイートは一泊4700€(60万円)で一般の人が泊まれるところではない。
西の部分はオフィス、託児所(80床)、低家賃住宅に生まれ変わった。かつて何でも揃った百貨店部分は全体の4分の1程度に縮小され、
高級ブランド店しかない。エルメス、グッチ、シャネル、ルイ・ヴィトンを筆頭に世界のお金持ち相手のショッピング場となってしまった。もう百貨店とは呼べない。コロナ禍でも高級ブランドは健在で、貧富の差はますます広がるばかりだと感じる。

12月に入りコロナ新規感染者数が一気に増えて5万人を超えたフランスは、今まさに第五波の真っ只中にある。ワクチンがなければとっくにロックダウンになっていたはずと、政府は3回目のブースター接種に力を注いでいる。
私も12月中に3回目の接種予定で、受けないと「衛生パス」が失効してしまう。「衛生パス」なしでは日常生活ができない。フランスも日本もオミクロン株でまたもや厳しい制限が課されるが、せめてクリスマス気分を少しだけ味わいたいと「サマリテーヌ」最上階で友人と二人でランチを楽しんだ。「サマリテーヌ」で私たちに購入できるものは何もなく、お昼のメニューが唯一手の届く値段だ。コロナ禍でオンライン通販が加速する今、百貨店の将来は厳しいように思えた。
2021年もまもなく終わる。コロナ禍との共存はまだまだ続きそうであるが、早く終息することを切に願う。（古賀順子記）

以下は12月21日帰国準備についての回答メールです。
今日は朝8:30から搭乗72時間前PCR検査に並びました。
クリスマスの移動時期に入り、ラボは長蛇の列。検査受付までに寒い中2時間待たされました。テストが終わったのは12時近くで凍えました。明日朝結果がメールで送られてきます。陰性であれば再びラボに並び、日本の厚生労働省フォーマット証明書を取ります。
日本入国水際対策は連日変わります。ついていけないくらい毎日変わります。
腹を括って、23日到着した時の運に従います。

古賀さんはコロナ禍でも数度帰省されているが、私は面談したことはない。自宅待機14日ルールの時は一歩も出られない監視体制がひかれているようです。今回の水際対策でどうなるか「時の運」と言われる意味です。